viewpoint 69

THE SAISON FOUNDATION

セゾン文化財団ニュースレター第69号
2014年12月5日発行
http://www.saison.or.jp
公益財団法人セゾン文化財団

The Saison Foundation Newsletter — 5 December, 2014

目次

高谷史郎◉舞台芸術というレンズから見える風景…… p.01
勝部ちこ◉ブルキナファソらしっど!?…… p.04
廣川麻子◉みんなで一緒に舞台を楽しもう!!
～特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークの取り組み～…… p.06

Article—❶

# 舞台芸術というレンズから見える風景

高谷史郎
Shiro Takatani

## 舞台芸術との出会い

今年で30周年を迎えたダムタイプには設立当時から関わっていますが、舞台芸術に興味があってダムタイプに入ったわけではありませんでした。大学では環境デザインを学び、建築や空間造形に関心がありました。ダムタイプの活動に関わり始めた当時、最初に思ったのは、劇場というのはラボラトリー（実験施設）のようなところだ、ということでした。例えば小さなものであれば、自分のオフィスで模型を造って見るということが出来ますが、大規模な構造物の場合、それがどのように見えるのかは、劇場のような大きな空間でないと分かりません。劇場なら、たとえば大きな階段状の舞台を造ったとして、どのような照明が当たると、どのように見えるか、という実験が出来ると思い、それで、イメージを具体化するための実験的な施設として、劇場に関わってモノを造ろうと考えたのです。しかし、実際には階段単体で良いということはあまりなく、舞台にどういうふうに「人」が存在して、その人がどういうことをしているのかによって、美しく見えたりするのだと気付きました。そのように劇場と関わり始めたわけですが、いまでは劇場というのは、パフォーマーを観るための空間であると思っています。そこに僕がどのように関われるのだろうかと、今も試行錯誤しています。

## 舞台芸術における「公平性」について

僕はインスタレーション作品も創っていますが、インスタレーションは、どのように作品が観客に観られているのかは分かりません。作品の鑑賞は自由に観客に委ねられているので、たとえば、18分の映像インスタレーションを展示しても、途中で飽きれば5分で立ち去るかもしれないし、作品を最初から見て欲しいと思っても、観客がどのタイミングで展示室に来るか、大抵の場合、コントロールすることはできません。

それに対して、劇場というのは、観客とある一定の時間を密接に共有する場所です。パフォーマンスの上演中は客席後方のオペレーショ

ンブースにいるので、お客さんの反応がとても気になります。最初は誰もいない劇場でリハーサルをしながら作品を創り、次に関係者だけでゲネプロを行い、そして本番で一般の観客が入りますが、観客の反応を受けて舞台の見方がリハーサルの時から極端に変わる時があります。そのような観客とシェアしている感覚が、インスタレーションとパフォーマンスの違いです。

パフォーマンス作品に取り組んでいるのは、舞台あるいは劇場という機構が自分にとって実験室であると同時に、製作の仕組みにも関心があるからです。

例えばインスタレーションなど美術作品は、観客は美術館や画廊などで安い入場料（あるいは無料）で作品を観ることができて公平なような気がしますが、それは基本的に、美術館や個人のコレクターが作品を購入しているから成立しているのであって、誰か財力のある人／機関が作品を買ってくれないと成り立ちません。

ダムタイプ作品『pH』（1990年） Photo: 高谷史郎

けれども舞台の場合、多くの観客がチケットを購入することによって公演は支えられています（もちろん、上演の全ての費用がチケット売上だけでまかなえる訳ではないのですが）。例えば京都の公演に友達を誘って、3,000円とか4,000円くらいで観に来てもらい、その後に作品が駄目だとか良いとか、対等に話が出来ます。作品が面白かったと言ってもらえればもちろん嬉しいが、面白くなかったと言われれば、どこが面白くなかったのかと話す中で、ああ、いまそう考えている人がいるのかと思うこともあるかもしれない。また、3,000円や4,000円くらいでそこまで文句を言わなくてもいいやないか、というやりとりも可能です。つまり、舞台は、美術のような特定のパトロン（美術館／コレクター）ではない、一般の複数の観客が、ある一定の時間を共有する目的でお金を出しあって成立させている。そこに公共性とも言えるものがあり、舞台芸術はアーティストと観客にとって公平で、多くの人とシェアできる、民衆的なメディアだと言えます。

## 強力なメディアとしての身体

僕にとって身体とは、音楽、映像、光、空間構成などの要素の一つであり、身体性という意味で僕がパフォーマンスに興味があるのは、それぞれのパフォーマーやダンサーの、その人自身から滲み出るものです。その人の最も本質的な魅力を、拡張、あるいはより良く伝えるシステムを舞台上に組みたいと思って作品を創っています。

僕の作品には、映像先行のシーンもたくさんありますが、パフォーマーと話し合っているうちに、映像だけのシーンに身体が入って来て、少しずつ映像を変更して、フィットさせた例があります。不思議なことに、当初は身体がなくて成り立っていた映像と音楽だけのシーンに、あとからパフォーマーを加えると、もうそのパフォーマー抜きでは考えられなくなるのです。そこに身体の強さを感じます。自分としてはフラットに扱いたいと思うのですが、お客さんはパフォーマーを通して舞台を観ているところがあり、やはり生の身体は強力なメディアだと思います。

## 日本と海外で活動して見えたこと

最近ヨーロッパのプロモーターやプロデューサーと話して感じるのは、多くの劇場がコンサーバティブ（保守的）になってきているということです。以前のような冒険や挑戦を極力しない。『明るい部屋』という作品を創った時に（*注：ステージが中央にあり両側に客席を配置した舞台）、僕としてはプロセニアムの形態からはみ出た、フリースペース仕様のインスタレーションに近いパフォーマンス作品を目指したのですが、そういう作品はなかなか上演してくれる場所がないのです。500席の劇場なら、500人が入るような作品を求められます。本来の客席を使わずに、舞台上に舞台と客席を仮設で設置するような特殊なことは、消防法などの問題もありますが、実現することは本当に難しい。『pH』など、ダムタイプが1990年代に創った作品では無茶苦茶なことをして、劇場ではない空間でいろいろやっていたのが懐かしいです。

でも日本にも、元は小学校だったところを使っている「にしすがも創造舎」など、本来は劇場ではないところもあります。アートは次々と生まれ、その時は面白いものであっても、アートとしてのクオリティを保てるメディア（媒体）はそれほど出てくるわけではありません。そのメディアがアートとして存続して行けるかどうかは、使い続けないと分かりません。今後日本や海外のアーティストは、いろいろな方向性で作品を創ることについて真剣に考えるべきだと思います。それが良いものであれば残ります。何が残るのかが分からないからこそ、あらゆる可能性を探り、サポートして行く必要があります。この点では、日本と海外では差がないように感じます。

## 日本で活動することについて

友人たちの中にも活動拠点を海外に移すアーティストがたくさんいます。ヨーロッパの方が発表の場も多いだろうし、そういう意味では活動しやすいのかもしれません。アーティストの数も海外の方が多く、層としての厚みがあると思います。

ダムタイプ作品『OR』（1997年） Photo: Arno Declair

高谷史郎作品『明るい部屋』(2008年) Photo: 福永一夫

ダムタイプ作品『MEMORANDUM OR VOYAGE』(2014年) Photo: 椎木静寧

僕が日本にいる理由は、日本が好きだからです。来年フランスで新しい舞台作品を創ることになっていますが、舞台装置にしても、日本で造った方が自分の思うようにコントロールができるのですが、海外だと、クオリティのコントロールが大変です。

具体的な例を挙げれば、今年(2014年)東京都現代美術館の「東京アートミーティング 第5回 新たな系譜学をもとめて 跳躍/痕跡/身体」という展覧会(2015年1月4日まで開催)にて、9月27日から11月16日まで展示していたダムタイプのインスタレーション『MEMORANDUM OR VOYAGE』は、ソニー PCLが運用している4Kビジョンを使っています。約900万個のSMD(基盤表面実装型LED)のディスプレイなのですが、そのうち、接触不良で消えているLEDがあったりすると、それを、僕たちが指摘する前に、担当者がそのパネルから消えている一粒1ミリくらいのLEDをピンセットで取り出して、新しいものをはんだ付けしておいてくれるのです。その日本的な、職人意識の強いきめ細かさが素晴らしいです。

また、近年は、坂本龍一さんや樂吉左衛門さん、渡邊守章さん、野村萬斎さん等の方々と仕事をすることが多く、日本にいるからこそ出来るコラボレーションがあります。

## ダムタイプとして12年ぶりの作品
## ──その集団性と今後の可能性について

上述のインスタレーション作品『MEMORANDUM OR VOYAGE』は、ダムタイプとして12年ぶりの新作です。なぜいままで12年間ダムタイプの作品が出来なかったのかは、このようなオファーが無かったということもありますが、以前一緒に創っていたメンバーが忙しくなり、会う時間がなくなってしまったからです。

しかし、考えてみれば、インスタレーションの場合、今までダムタイプで創るときも、全員総がかりでというわけではなくて、何人かコアのメンバーがアイデアを出し合って創っていました。だから今回、これを機に新しいメンバーと新作を創りたいと思ったのです。同時に、古いメンバーにも声をかけ、参加出来る人には参加してもらいました。泊博雅さんはいつものように映像の重要なパートを担当してくれましたし、昔の音源を再構成するにあたっては池田亮司くんといろいろ意見交換しました。過去の音源や映像を、新作インスタレーションとしていかにトラックダウンする(まとめる)かが、今回新旧のメンバーにとってのテーマでした。

ここで一つ重要だと分かったのは、アーカイブ的な作業への取り組みです。今回は、十数年前のハードディスクがまだ動いたので、昔のデータを変換してラップトップのコンピューターに入れられました。そうしておけば、過去のハードウェアが壊れて動かなくなった後でも、データは生き続けます。ダムタイプはビデオテープの時代から活動していて、セゾン文化財団から複数年にわたる助成をいただいていた頃(1993年度〜1996年度)に、ベータカムとM2の編集機を買いました。そのテープが山ほどあるのですが、これを何とかしないとそのうち観られなくなります。本格的にアーカイブをつくるとなると、時間がかかって大変で、そこに時間を使うのなら、アーティストとしては生きている限りは新しい作品を創りたくなります。しかし今回の経験から、『pH』など他の作品も、いまのうちに新しいフォーマットに変換する必要があると思い始めています。

ダムタイプはフラットな関係ですが、創作に時間がかかります。そこがまたダムタイプの良いところで、みんなに時間があって、ゆっくり創れるのであれば理想的です。ダムタイプというのは、みんながアイデアを出しやすい「箱」だと僕は思います。出来た作品は参加したメンバー全員で共有できます。ダムタイプが「箱」であれば、昔のメンバーが忙しくて参加出来ないからダムタイプの作品が創れないというのは変だと、今回のインスタレーション作品を創って思いました。だからこれからは、新しい人たちが創って行ってくれるのも面白いと感じますし、そこでいい人たちが集まれば、いい作品が出てくるだろうという気がします。

**高谷史郎**(たかたに・しろう)

84年より「ダムタイプ」のメンバーとしてパフォーマンスやインスタレーションの制作に携わりビジュアルワークを総合的に担当。90年からダムタイプと並行して個人の活動を開始、主な活動としては、05年「雪と氷との対話」展(ラトビア国立自然史博物館)。07年 北極圏遠征プロジェクト Cape Farewell(イギリス)参加。08年 パフォーマンス《明るい部屋》初演(Theater der Welt、ドイツ)。12年 パフォーマンス《CHROMA》初演(びわ湖ホール)。13年 東京都写真美術館で個展。14年 札幌国際芸術祭参加など。また、坂本龍一、中谷芙二子、樂吉左衛門、オノセイゲン、野村萬斎、渡邊守章等との共同制作作品も多数。

http://shiro.dumbtype.com

Article—❷

# ブルキナファソらしっど!?

勝部ちこ
Chiko Katsube

渡航目的の重要性、緊急性を鑑みて、芸術家、制作者に対して、国外への渡航費を助成するプログラム「フライト・グラント」を当財団が2014年度より試行版として開始している。最初の助成対象者で、西アフリカのブルキナファソのフェスティバルに参加した勝部ちこ氏にご寄稿いただいた。

（編集部）

## CIすごろく世界旅行!

ブルキナファソ、という国名。正直、馴染みがありませんでした。2012年夏にマダガスカルのダンスフェスティバル、I'Trotraで出会ったブルキナファソ人アーティスト、オリビエ・タルパガにInternational Nomad Express Multi Art Festivalに誘われた時は、まだ半信半疑。コンタクト・インプロビゼーション（CI）は確かに世界的に広がりを見せるダンスですが、アフリカで私たちがCIの一端を担うことになるとは想像もしていなかったのです。そもそもご縁は、東京→韓国→マダガスカル→そしてブルキナファソへ。それぞれの場で出会った人が繋げてくれて、まるで「CIすごろく世界旅行!」

それにしても。今回の任務ほど、事前のやりとりが少なかったケースはありません。日程も内容も対象もほとんど取り決められず、しかも手に入るガイドブックはないので旅先の情報が乏しい。ただただ、黄熱病の予防接種を受け、ビザを申請し、蚊帳と国旗を買い、前日真夜中までかけて万能梅エキスを作り、マラリアの心配をしながら旅立ちました。2014年5月23日の事です。

Ouagadougouと書いてワガドゥグーと読む首都の空港に真夜中に辿り着いたら、オーガナイザーのオリビエが、音楽家一人とウガンダからのダンサー男子三人を引き連れて迎えにきてくれました。宿舎へ向う車の中では、私たちを歓待する音楽が即興で始まります。その歌のエネルギーの凄い事! シンプルかつストレートな喜び伝達手段。私はいつ以来していなかっただろう、と振り返ります。

## 街の様子、暮らし

街は、赤い土ぼこり。主要な道は舗装されていますが、枝道は全て未舗装。往来には、鶏、ヤギ、牛、犬、たまに猫、馬、いろんな小鳥、、、、道路に面してバラックのような店が並びます。そんな店を、現地の人たちは「ブティック」と呼びます。

子どもの遊びは工夫して創作 Photo: 鹿島聖子

この後、走りよってきて「Bonjour!」と握手 Photo: 鹿島聖子

裸足の人は比較的少なく、だいたい皆、同じようなレベルで生活しているように見えます。路上生活者も少ないし、子守りする子ども、若すぎる母親、物乞い、押し売りもあまり見かけない。

はにかみながらも笑顔が滲み出す子どもたちが走りよって来て「ボンジュール!」と声を掛けてくれました。疑う習慣の付いた自分を恥ずかしく思いながら返事を返します。「この国の人々は素朴でいい人たちなんだ」と安堵しながら。

ブルキナファソの首都、ワガドゥグーで見るのは、決して豊かな暮らしとは言えないが、悲壮感のまったくない人々でした。目立った産業や観光資源がなく、ビジネス客、観光客はほとんど見かけない、そのような国でこそ守られた大切な物・心があるのではないかと想像します。江戸時代の終わりに西洋人がやってきて、日本人の体型や体力、質素な暮らしぶりと笑顔に驚いたという話を思い出しました。

往来は、くたびれた車とそれの3倍くらいの数のオートバイが行き交います。その100%がノーヘルメットで半数が二人乗り。ぎょぎょっと思う暇もなく、自分にも後座席にまたがるチャンスがやってきました。公共交通機関がなく皆が自力で移動する街では、旅行者は集団輸送か、バイクの後に乗せてもらうしかありません。人生初のバイク、ノーヘル、二人乗り。前で運転するのは初めて出会った現地のダンサー。信号待ちで周りをバイクに取り囲まれた時、発進と同時に荷物を引っ張られるような事件に出会うかも、と最悪な事態が頭をよぎります。しかし私は無事でした。何も悪い事は起きず、安全に送り届けられ、後にはふらつく身体とやや興奮気味の自分がいました。

## フェスティバルの実態

今回のフェスティバルは、自分たちにとっては確かに我慢大会の20日間でした。

1) 事前に分かっている情報の少なさにより、気楽で良いけれども準備のしようがない
2) スケジュールがあまり綿密ではなく、よく変更する
3) 公共の交通機関がないので団体行動を余儀なくされ、時間はセットされるが、守られたためしがない
4) 食事の担当者が不在、いつどんな食事が取れるか不明。数日、同じメニューが続き、あげくは残り物だけで済まされる事もある
5) 暑さと食生活の差などから、一人ずつ外国人がダウン。マラリアにかかる人も
6) 毎日必ず起きる断水と停電。冷蔵庫の中のものは、どれも信用出

フェスティバルの主催者、オリビエ・タルバガ（右から二人め） Photo: 鹿島聖子

アフリカンダンスのクラス Photo: 鹿島聖子

来なくなる

7) ドアに鍵が無い、灯りが点かない、紙が無い、水が流れない、便座も無い、のがトイレの普通

以上、マイナス面を書き連ねると、おそらく1頁を越えるかも知れません。それでも、今回のフェスティバルに参加した事が大いにプラスに働いていると思えるのは、地元の人々の素直さ、明るさを知った事でしょうか。日本人には持ち合わせないスタミナや、ダンスが好きでたまらない！と体全体で表現する人々。音楽も同様。時空間を満たしきった音の洪水に、リズムに合わせるなどという次元ではなく、ダンスと音楽、そして生きているという事が一体となっている。これはこの国に来ないと目撃／参加／体験出来なかった事なのです。

ブルキナファソの人々は、年長者を敬う習慣が身に付いていて、礼儀・礼節も息づいているようです。ウガンダからの若者には失われた礼儀作法を、ウガンダよりもおそらく未開発であろう国、ブルキナファソの人々は持ち続けている。例えば、こんなシーンをよく見ました。後から部屋に入ってくる人は、そこに既にいるひとりずつ全員に挨拶をしていく。互いの指で音を出す、ちょっとした振付のような粋な握手と、言葉掛けと笑顔。この習慣、マダガスカルでも見ましたが、何度見ても、凄いなあ、いいなあと感じます。時間が掛かるけど、そんな事は気にしない。習慣であり礼儀作法。真似をしようとしても、即座にはできないものです。少々恥ずかしい気持ちになりました。

さらに、私たちから見て、食糧事情が十分ではないと思えるのに、彼らの身体と運動能力、スタミナには目を見張るものがあります。日中の気温が40度以上にもなる暑さの中、激しいダンスを長時間続けても、音を上げる人はいません。身体中から大汗をかいても、ほとんど体臭はなく、奇麗なサラサラの汗なのでしょう、終わって着替えれば、みなスッキリお洒落な人たちです。

## Nomad Express Festivalのメインメニュー

アフリカンダンスのクラスは、さすが本場。身も心も大きな先生は、昔、アルヴィン・エイリー舞踊団にも所属し、パリでの芸術活動の後、本国ブルキナファソに戻り、若手ダンサー育成の為に自費を投じてダンススクールを作り上げたイリーナさん。伴奏の音楽家が7人編成。贅沢な音環境。その音に負けない大声の先生とスプリンクラーかと思う程、汗を吹き飛ばしながら踊るダンサーたち。クラス構成もあっぱれ！大きな拍手とみんなの笑顔で終了する。

他には、丁寧なボディーワークのクラスや、コンテンポラリーとアフリカンの変なミックスのクラスや、アメリカ人講師のリリース系コンテンポラリークラス。

そして、私たちが任されているCIのクラス。経験者は多くなく、基礎から始めます。が、この暑さ。接触したり、床をスライドしたりはまず不可能。CIの中でも接触を絶対とはしないタイプのワークを選びます。終わってから感想を聞けば、アフリカンダンスは、大地を踏みならしたり、音楽と動きで時空間を満たすようなタイプだけど、この日本人のダンスは繊細で静かで柔らかい、だから気に入った、と。確かに、私たちの永遠のテーマは、「CIに於ける間」ですから引算してなんぼの世界です。両者、ない物を分かち合う、とても良い関係かもしれません。

オーガナイザーが今回のフェスティバルの柱のひとつに掲げていたものに、「メンターシップ制度」があります。海外からの講師に、現地の若手アーティストを1名ずつ組み合わせ、メンター（育成者）とメンティー（被育成者）の関係ができあがります。それぞれが個別でレッスンやディスカッションをし、できればその関係を今後も続けていきましょう、というものです。

私には、アジズという男の子のダンサーが組み合わされました。英語の不得意な彼と、フランス語が「ジュヌコンプロンパ〜」の私は、苦労しながら会話を楽しみ、お互いのダンスを見せ合い、一緒にインプロセッションを試みました。若いながら、非常に才能を感じるアーティストです。素朴にして鋭利な芸術的感覚。クレージーだけど健康的。特に仕込まれたダンステクニックというものは感じないのに、奇麗な肉体に丁度はまる運動と精神性。ブルキナファソにはこのようなダンサーがいるのだ、と感動を覚えます。彼らからすれば、日本のダンサーはとてもミステリアスで不思議な感覚を持ち、かつ経済的にも恵まれているので可能性がたくさんある、と思うのでしょう。確かにそうです。今回のメンターシップでの収穫と責任は、ブルキナファソやアフリカの若手に、日本文化、習慣、精神、など良い所を伝え、彼らの驚くべき才能を日本の人たちに紹介するチャンスを作る、ではないかと思っています。

公演で、私たちのデュオ作品を披露した所、前述のイリーナさん（この国の王族の血を引き、現大統領にもプライベートで電話する度量も声も人間も全てが大きな人物）が大層気に入ってくれて、彼女がオーガナイズする別のアートフェスティバルに招待する！と言い出しました。

嬉しい半面、やや複雑。脆弱なインフラ環境にも気候にも大丈夫な覚悟が必要だわ、ついでに言えば、ブルキナファソまでの渡航費って半端じゃない。今回は本当に運良くセゾン文化財団の試行プログラム、フライト・グラントが頂けたけれど、それ無くしてはお金の準備期間には足りないわ、とのこちらの懸念もなんのその。早速、在ブルキナファソ日本大使館にコンタクトを取り、旅費の申請をしているらしいと聞きます。その後、西アフリカから発生のエボラ出血熱の騒ぎで、この話の行方はどうなった事でしょう。

かくして、即興的に始まったアフリカとのご縁は、まだ続きがあるようです。強靭な胃腸と体力、フランス語会話力を身に付ける、が間に合いますように!!!

Photo: 鹿島聖子

**勝部ちこ**（かつべ・ちこ/大阪-東京-NY-東京-鹿児島）

お茶の水女子大学・大学院で舞踊教育学を修めた後、ニューヨークにダンス留学。ふれあうことから始まるダンス、コンタクト・インプロビゼーションを軸として活動を展開するグループC.I.co.を2000年春、東京に設立。以来、国内外に活動の場を広げ、「コミュニケーション」「身体」「社会性」について研究と実践を続ける。2012年夏、C.I.co.は鹿児島県伊佐市に転拠。2013年10月には伊佐市、霧島市、東京を会場にアジア4カ国と協同するCI国際フェスティバル、I-Dance Japanを開始。共著「協同と表現のワークショップ」（2010 東信堂）の中でCIワークショップの事例紹介。現在、一般財団法人地域創造公共ホール現代ダンス活性化事業登録アーティスト。

http://www.ci-jp.com

Article—❸

# みんなで一緒に舞台を楽しもう!!

## ～特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークの取り組み～

廣川麻子
Asako Hirokawa

### 演劇とのかかわり

耳が聞こえない人が演劇をどのように？と思われるかもしれませんが、聴覚障害を持つ私が演劇と関わるようになったのは、実は幼少時にさかのぼります。聴こえない子どもたちのための民間教育施設「母と子の教室（現・聴覚障害児とともに歩む会トライアングル）」の卒業生を中心に結成された「難聴児の劇団エンジェル」での活動が演劇との出会いでした。人前に立って演じることの楽しさから高校演劇での活動につながり、さらに和光大学での学びが大きなきっかけとなりました。

和光大学では、障害を持つ学生が多数入学しており、その様態は実にさまざまでした。見えない人といっても、全盲、弱視、光だけ見える人、など幅広いものでした。障害のある人、ない人が互いに助け合い、支え合って生きていくという建学精神を継承して、それが校風となっていました。そのため、学生生活の風景の中にごくごく当然のように車いすを使う学生がいましたし、スロープがないところは学生が協力し合って運んでいくというような雰囲気でした。

そのような中で、障害者問題研究会というサークル活動を通して、「誰でも楽しめる演劇づくり」について考えるようになりました。大学4年のときに日本ろう者劇団に入団し、俳優としての活動の傍ら、時折、制作事務を手伝うようになったことから、企画全体について考えるようになりました。

### 英国での体験

ご縁があってダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業第29期生として英国ロンドンにて2009年9月から1年間、さらに自費で滞在し2010年11月に帰国しました。

ロンドンのフラットでルームメイト4名とともに暮らしながら、Graeae Theatre Company（以下グレイアイ）を拠点に、さまざまな団体で研修を受けました。グレイアイの芸術監督Jenny Sealeyが今回の研修コーディネーターを引き受けてくれました。彼女との出会いは、2007年10月エイブルアートジャパン主催公演「飛び石プロジェクト『血の婚礼』」に出演したことがきっかけでした。聾者でもある彼女は聾者、盲者、車いす利用者がプロの「健常」俳優とともに作品を作り上げ、誰にとっても分かりやすい芝居作りをする方針を持っており、そのやり方はまるで、大学祭で障害者問題研究会として披露した「手話劇」のようでした。みんなが参加出来る演劇をもっと学びたいと希望し、お陰で7か所、のべ23件の研修を受けることが出来ました。そのほかにも自主的にセミナーやワークショップ等に参加しました。

また英国では情報保障（アクセス）が徹底されており、劇場の責任で1公演の間に必ず手話通訳・字幕・音声ガイドを付けることになっています。そのため60本以上の観劇をすることができました。うち40本以上になんらかのアクセスがありました。ウェストエンド等で上演されるような『オペラ座の怪人』『レ・ミゼラブル』などの有名ミュージカルを手話通訳や字幕付きで、まさにリアルタイムで楽しむことができました。それと同時に、日本での観劇環境の貧しさを思いました。2009年当時の日本では台本貸出すらも断るところが多く、小劇場に出演する知人を通して個人的に見せてもらうという形が殆どでした。一部の団体で字幕をつける試みを行っていますが、その費用は全額劇団負担となっています。英国では劇場責任といっても政府からの援助があり、また観客サービスの一環という考え方が普及しており、障害を持つ人の存在を観客動員に結び付けたさまざまな取り組みを行っていました。

とりわけ衝撃を受けたのが、アクセス情報を提供する仕組みが整っている事でした。ロンドン劇場組合が運営している公演情報サイト「Official London Theatre」のコンテンツのひとつとして「アクセス」というページを提供しています（文末ご参照）。手話通訳、字幕、視覚障害のお客様のための音声ガイドがついた公演情報を一覧にしており、公演詳細だけでなく、予約も直接出来るようになっています。ジャンルや日時で絞り込み検索もできます。また、車いす利用者のために

駐車場や施設などの情報も整理されています。予約の連絡先はアクセス担当者直通であることが分かるよう、access@...というようなメールアドレスとなっています。

もうひとつ、驚いたことは劇場のアクセス担当者にむけた障害理解セミナーの開催でした。これは障害者に芸術を届ける活動をしているチャリティー団体「Shape」で研修した時、セミナー準備をお手伝いしましたが、プログラムは多岐にわたっており、どのような支援の方法があるのか、それぞれの特性などなど、障害を持つお客様を迎えるにあたっての心構えを学べるようになっていました。そして、講師陣が障害を持つ専門家でした。つまり当事者から学ぶという姿勢が徹底されていました。また、セミナーは午前・午後で5日間のプログラムとなっていました。ブレイクタイムはコーヒーのポットサービス、ランチタイムはバイキング形式の食事も提供をするなど、ホスピタリティが充実していました。受講料もその分、高価でしたが、それでも10人ほどが集まっておりました。

意識調査

活動展示

## 帰国してから

現地の聴こえない方に何故このような環境になったのかと尋ねたところ、障害団体が連帯して運動した成果だとの話に、意を強くし、日本でもこのような仕組みを創ることを決意しました。帰国後すぐには出来ませんでしたが、さまざまな幸運により、聴こえない仲間、演劇好きな聴こえる仲間たちの賛同を得て、2012年12月に任意団体として設立しました。それから助成金を得るため、また社会的信用を得るために、2013年7月にNPO法人格を取得しました。

2013年度の活動は、聴こえない人たちの観劇行動の実態をつかむため、全日本ろうあ連盟主催「情報アクセシビリティフォーラム」の展示会場にて意識調査を行いました。聴こえない人と聴こえる人の差があるかどうかをみるため、それぞれ100人ずつに調査をしたところ、興味深い結果が出ました。

劇場に行かない理由として、聴こえる人は「忙しいから」というのが理由にありましたが、聴こえない人は「思い通りに楽しめないから」が一番の理由になっていました。そして、「もしアクセスがあれば行くと思うか?」との問いに「行くと思う」との声が圧倒的に多くありました。さらに「興味のあるジャンルは?」と訊くと、国内最大規模のミュージカル劇団の名前が回答として戻ってくる例がいくつかありました。これはJR等で広告を打っていることからよく見かける、しかしアクセスがないのであきらめている、というようなことが推察されます。

そういったことを踏まえ、2014年度はウェブサイトの構築と、意識調査の規模を拡大し、説得力のあるデータにしていくことにしました。幸いなことに、助成金をセゾン文化財団のほか、日本財団からもいただくことができました。

## シアター・アクセシビリティ・ネットワークの取り組み

支援・研究・啓発を柱に、活動の展開をはかっています。

1. 相談支援I(劇場からの相談)
例)「障害を持つお客さまに来ていただきたいが、どのような形がよいのか?」など。
2. 相談支援II(当事者からの相談)
例)「商業演劇で台本貸出を頼みたいがどうしたらいいか?」「磁気ループ[*註:聴覚障害者用補聴器を補助する放送設備]を使って観劇したいがどうしたら?」
3. 公演情報の収集と発信(ウェブサイトの構築、リリース)
アクセシビリティ公演情報サイト http://ta-net.org/event/
とりわけ、フェイスブック等の影響力はあなどれない、というのが実感です。なお、ウェブサイトは聴こえない人に仕事をお願いし、雇用の可能性を広げられたのではないかと自負しています。2014年7月にリリースしてから11月現在までに75件の情報を掲載しています。当初は情報を検索し、こちらから問い合わせては掲載作業をしていましたが、最近は劇団のほうから掲載依頼をしてくれるようになりました。ありがたいことです。こうして繋がることが大切だと実感しています。
4. 意識調査(アンケート調査)
個人向けの調査を聴こえる方・聴こえない方それぞれ500名ずつに拡大し、また全国的な傾向を知り、なるべく回答の層を広くするため、いろいろな場所で調査協力をよびかけています。
この他に、劇場側の意識もさぐるため、全国の劇場2000か所にアンケートを発送しました。さらに、主催団体100か所にも同じ内容を問うものを発送しました。発送先の基準として、文化庁からこの3年で500万円以上の助成金をうけている団体に絞り込みました。テレビ局が主催することも増えているので、テレビ局宛にもお出ししました。いわゆる商業演劇を行う団体にも出しています。どれだけの回答が集まるか不安でもあり楽しみでもあり、といったところです。締切を11月としていますが、すでに160通以上の回答が寄せられております。
情報保障についての認識の有無についてを問う設問では、「知らなかった」という意見が圧倒的多数でした。しかしながら、行動に結びつけることはなかなかむずかしいようでした。興味深い結果が出そうです。集計と分析を行い、2015年3月28日のシンポジウムで発表予定です。
5. 支援研究チーム
2013年度はポータブル字幕提供元や再構成台本、舞台上での手話通訳について実際に観劇した上で意見交換会を行いました。ここで出た意見や意識調査の結果を踏まえて、今年度は手話通訳と字幕表示それぞれの支援方法について様々な可能性をさぐる勉強会を企画しました。
9月は「演劇における舞台手話通訳を考える」として勉強会を開

茶話会（字幕に関する意見交換）

定期総会にて

催し、60名以上の方に参加いただきました。日本で舞台手話通訳の経験を積んでいる人、聴こえない演劇人、通訳と映画・演劇の熱心なファンである人をゲストに招き、演劇における手話通訳の専門性について考えました。

また、2015年1月末に行われる演劇実験室◎万有引力の公演において文化庁委託事業「平成26年度文化庁戦略的芸術文化創造推進事業」（聴覚障碍者の為の、上演用台本の事前貸出）を受けることになったことから、この機会に聴覚障害以外の障害にも対象を拡大し、視覚障害を持つ当事者の方をお招きし、観劇ニーズについてお話を聴く勉強会を11月に行いました。舞台模型製作を日本舞台美術家協会にご協力いただき、舞台模型の新たな可能性についても考えられたらと思っています。

12月10日は字幕に関する勉強会を行います。ポータブル字幕や舞台設置型字幕など様々な方法が出ていますので、一堂に会して現状と課題を整理し、舞台における字幕について演劇人にも積極的に参加いただいて、ともに考える機会となればと願っています。

6. 広報活動（展示や講演などの啓発）

このような取り組みを知っていただく相手先として重要なのは、実は聴こえない当事者です。聴こえない人の場合、手話による演劇活動が盛んではありますが、絶対数が少なく、いつでも常に楽しめるわけではありません。また好みもあります。有名俳優が出ていることで興味を持っても断念するという例、当初から諦めている例などがあります。字幕や手話などの支援があれば楽しむことができるということを、さまざまな集いの中で、展示や講演を通して紹介しています。対話を通して、さまざまな希望や意見、情報を得ており、インターネットで発信するだけでなく、直接、顔を観てお話することの大切さを痛感しています。

## 今後の展望

現状では、個々の劇団や主催団体の好意により行われており、その経験値が共有されていません。また、気持ちがあっても人的・金銭的に難しい団体もいらっしゃいますので、観客・主催団体どちらにとってもよりよい観劇支援システムの構築が重要と考えます。どのような形で行うのがよいのか、演劇界全体はもちろん、行政も巻き込んでの議論を行い、世論形成をはかりたいと考えています。

2015年3月28日に森下スタジオでシンポジウム「よりよい観劇支援システムの構築にむけて今できること」を行いますが、アンケート調査の分析結果、そして万有引力公演での支援モデル実施結果について、当事者団体、演劇関係者を招いて考えていきたいと思っています。そこでの議論を踏まえ、2015年度は委員会を立ち上げ、より効果的な提言をしていくことを目指します。

また、2015年は演劇における専門性をもった手話通訳を養成するためのカリキュラム作成委員会を立ち上げ、モニター講座の企画実施を通して適切な養成方法を検討・提案していきます。さらに英国の視察や海外事例の収集を積極的に行い、現地団体との情報交換を通して、後発組ならではの、日本の事情に合った、よりよい形を探っていけたらと考えています。

聴覚障害だけでなく、観劇に支障を感じているすべての人が自分の希望にあった観劇スタイルで演劇世界を楽しみ、豊かな文化生活を享受できれば、こんな素敵なことはないと夢を描いています。

**ロンドン劇場組合が運営する公演情報サイト「Official London Theatre」の「アクセス」ページのURL:**
**http://www.officiallondontheatre.co.uk/access/**

**廣川麻子**（ひろかわ・あさこ）
特定非営利活動法人 シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（TA-net）理事長。1994年、日本ろう者劇団入団。2009年9月~2010年9月、ダスキン障害者リーダー育成海外派遣事業第29期生として英国の劇団Graeae Theatre Companyを拠点に障害者の演劇活動をテーマに研修。この時に観劇における支援制度に衝撃を受け、日本でもこのような仕組みを創りたいと仲間たちとともに2012年12月に観劇支援団体「シアター・アクセシビリティ・ネットワーク」を立ち上げる。2013年4月より個人事務所「ヒロカワ企画」を設立。俳優、制作、ワークショップ、企画運営など演劇を中心とした活動を展開中。

今後の予定:
シンポジウム「よりよい観劇支援システム構築にむけて今できること」
2015年3月28日（土）午後1時～5時　森下スタジオにて開催（参加無料）
詳細はシアター・アクセシビリティ・ネットワークの下記ウェブサイトにて告知:
http://ta-net.org/

viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第69号
2014年12月5日発行
編集人: 片山正夫
発行所: 公益財団法人セゾン文化財団
〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-1 東貨ビル8F
Tel: 03-3535-5566　Fax: 03-3535-5565
URL: http://www.saison.or.jp
E-mail: foundation@saison.or.jp
●次回発行予定: 2015年2月末　●本ニュースレターをご希望の方は送料（92円）実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。